



## 東日本大震災被災地でMOA美術館児童作品展

# 子どもたちの明るい作品が地域の復興を後押し



応募総数が44万点を超え、質量共に国内最高レベルと称されるMOA美術館全国児童作品展の地方展が国内外各地で開催されています。東日本大震災によって甚大な被害を受けた岩手、宮城、福島をはじめとする各県では、津波によって昨年まで使用していた開催会場が喪失したり、地元の企業や市民が被災したために運営を支える協賛金が得られないなど、さまざまな困難に直面しました。それでも、当地の実行委員会の尽力と、全国各地の実行委員会やMOA美術館などの支援により、不自由な中にあっても作品展が開催されています。

その中の一つ、福島県相馬市、岩手県釜石・遠野・大槌地区での作品展の様子を主に紹介します。

## 東日本大震災被災地でMOA美術館児童作品展 子どもたちの明るい作品が地域の復興を後押し

**青森**  
八戸児童作品展  
八戸ショッピングセンターラピア  
10月15～16日



八戸市での作品展（小屋敷孝実行委員長）には、913点の応募があった。今回特別に設けられた「震災復興賞」は、絵画「強そうな声よし鳥」、書写「親切」が受賞した。

**岩手**  
久慈地区児童作品展  
久慈市立中央公民館  
10月15～16日



久慈地区の作品展（谷所邦三実行委員長）では、久慈市や野田村などの児童の絵画118点が展示された。表彰式には、地元小学校長をはじめ、多数の市民が訪れた。

**岩手**  
宮古・下閉伊地区児童作品展  
宮古市中央公民館分館  
9月24～25日



宮古市や山田町など、宮古・下閉伊（しもへい）地区の作品展（千葉胤嗣実行委員長）では、絵画445点が展示された。表彰式には、山本正徳宮古市長ら多数が訪れた。

**岩手**  
気仙地区児童作品展  
南三陸ショッピングセンターサンリア  
10月8～10日



大船渡市や陸前高田市、住田町の気仙地区展（佐々木忠和执行委員長）では、絵画、書写合わせて902点の応募があった。全国展審査員の遠藤友麗・女子美術大学客員教授の復興支援特別講演も行われた。

**宮城**  
県北児童作品展  
栗原文化会館  
10月22～23日



大崎市、栗原市、登米市の宮城県北の作品展（高橋清美実行委員長）には、1,022点の絵画、書写作品が寄せられた。小野寺五典衆議院議員をはじめ、多くの市民が来場した。

**宮城**  
気仙沼児童作品展  
気仙沼市松岩公民館  
12月3～4日



気仙沼市、南三陸町の気仙沼作品展（小松泰子実行委員長）には、絵画、書写合わせて562点の応募があった。10月には、同展の入賞作品が秋田県での「全国児童作品展復興支援巡回展」でも展示された。



## 岩手県釜石市 MOA美術館釜石・遠野・大槌地区児童作品展

内陸の小さな公民館で実施  
被災地支援への  
感謝がこもる作品に訪れた人が勇気を得る



来場者の癒やしを願って、いけ花体験コーナーも設けられた

11月6日、実行委員会の尽力で実現した第12回MOA美術館釜石・遠野・大槌地区児童作品展（岩井利男実行委員長）。死者・行方不明者が2千人を越すなど、沿岸に近い所ほど壊滅的な被害を受けた釜石市や大槌町では、仮設住宅での被災者の孤独感、仕事や生活再建への不安からくるうつや自殺者の増加などが懸念され、心のケアが重要な課題となっている。それだけに同作品展には、子どもたちの作品から喜びや感動、希望と勇気を得てもらいたいとの願いが込められた。

昨年までの作品展会場が被災したため、今年は内陸地にある釜石市野田集会所で開催。応募作品309点のうち、受賞作品50点の展示となった。被害が大きかった釜石市沿岸部の鶴住居小学校の前川育緒佳さん（小6）は、ユリやヒマワリなどを描いた絵手紙「ありがとう」で銅賞を受賞した。

「自宅が津波で流されて避難所にいた時に、ボランティアの人たちから、たくさんのお食料や物を届けてもらって本当に助かりました。少しでも感謝の思いを届けたくて描きました」  
そんな子どもたちの絵画を前に、保護者はもちろん、地元紙の告知記

### 児童の作品



### 地域の復興の力にと願って

実行委員会事務局長 藤井 進

会場も流され、当初は、今年の開催は不可能だと諦めていました。しかし、いつも参加してくれる小学校から、子どもたちのためにも開催してほしいと依頼を受け、実行委員会のみんなで頑張りました。会場の確保や道具の手配、資金の工面などのめどが立たず、諦めかけたこともありましたが、多くの方のご協力のもと、無事開催できたことに心から感謝しています。規模は昨年に比べても小さなものですが、子どもたちの元気につながると共に、明るく伸びやかな絵が、少しでも地域の復興の力になってくれればと思います。

## 福島県相馬市 MOA美術館相馬市児童作品展

津波・放射能被害の中、  
過去最多の596点集まる  
復興のシンボル「ヒマワリ」などが胸を打つ



表彰式で立谷相馬市長が、感性豊かな作品をかいた子どもたちをたたえた

11月3日、福島県の相馬市コミュニティセンターで開催された第14回MOA美術館相馬市児童作品展（荒秀一実行委員長）。民家をのみ込み、500人を超える人の命を奪い、今も深い爪跡を残す大津波、そして放射能問題が市民生活に大きな影を落とす中、実行委員会の「子どもたちを励ましたい。市民の力になりたい」との熱い思いで開催された。応募数は過去最多の596点。復興のシンボル「ヒマワリ」や、放射能対策で屋内退避を余儀なくされ、北海道や沖縄など、夏休みに一時避難した地での思い出を描いた作品などが、感想文と共に展示された。

小学2年生が描いた「ドリームトレン」には「つなみでしんだじいちゃんとおばあちゃんといもうとの〇〇、ペットたちはほしになつたとママが教えてくれました。だからぼくがうんでんする空とぶでんしゃであいに行くんだ」、小学3年生の作品には「ぼうしやのうをすいとつてくれる、ヒマワリをいっぱいかきました」、未来の海の様子を描いた小学4年生の作品には「震災で相馬の海もじん大なひがいを受けた。しよらいはキレイな魚達がたくさん住む海にしたいです」など、絵に込められた児童の思いが見る人の胸を打つ。

### 児童の作品



### 感性豊かな作品に復興への手応え

相馬市長 立谷 秀清

大震災では多くの市民が犠牲になり、海岸付近は壊滅状態、原発事故により生活への不安もある状態です。私たちは、地域の復興と同時に、子どもたちの育成に責任を負っていますが、今日の作品を見て、復興への手応えと力強さを感じました。写実力も大事ですが、それを発揮する豊かな情操、感性が感じられました。その培いが大切だと思うのです。絵を描くことは、子どもたちの心のケア、その心の成長を後押しするものでしょう。

大変な中にあっても開催に尽力くださった関係者の皆さんには、心から感謝しています。

そして、力作一点一点をじっくり見つめる立谷秀清相馬市長をはじめ、各小学校の校長、受賞した児童や保護者、市民一人一人に、晴れ晴れとした笑顔が生まれていく。  
「自宅周囲は津波にのまれ、その後は放射能の影響で外にも行けないような状況の中で、一生懸命に描いていた娘。私の励みにもなります」  
「災害を吹き飛ばすような、明るく、力強く、伸び伸びと表現されたものが多く、大変うれしく、また感動しました」  
子どもたちの感性豊かな明るい作品一つ一つが、市民の心の復興を後押ししている。